

若い感性に本物のオペラを!

『スペース★トゥーランドット』が子どもたちを魅了する。



あのトゥーランドットがスペースファンタジーとして蘇った

「難しい」「時間が長い」「料金が低い」などの理由で、日本ではオペラの愛好家が一部に偏っている感がある。財団法人 新国立劇場運営財団では、ファン層拡大の意味も含め、子どもたちに気楽にオペラに触れてもらうイベントとして「こどものためのオペラ劇場」を開催している。

光線銃『イナバウアー』に、サイボーグ、宇宙船。大人が見ても楽しいオペラを格安料金で上演。

2007年7月、東京新宿にある新国立劇場に今年も多くの子供たちが集まった。お目当ては中劇場で開催される「こどものためのオペラ劇場」である。同劇場を運営する財団法人 新国立劇場運営財団は、2004年より毎年夏休みにこのイベントを開催しているが、2007年度の演目は『スペース★トゥーランドット』だった。

巨匠プッチーニ作「トゥーランドット」というと、トリノ冬季五輪フィギアスケートで荒川静香選手が金メダルを獲得し

たことを思い出す人も多いただろう。今や日本人にもっとも馴染みの深いオペラ曲だが、通常は3幕、2時間30分ほどで上演されるオペラである。

「これを勧善懲悪のスペースファンタジー仕立てにし、約1時間の作品にまとめたのが『スペース★トゥーランドット』です。例えば、相手を凍らせてしまう光線銃が出てくるのですが、

その名前を『イナバウアー』にしたり、随所に子どもたち向けの工夫を凝らしていますよ」と同財団 支援業務室の前田秀文さん。

“美しくもねたみ深いジェラート星の王女トゥーランドットは、自分よりも美しいといわれるフローラ星のラベンダー姫をさらってしまう。主人公キャプテン・レオたちは、トゥーランドットから出された3つの謎とときに挑戦して見事ラベンダー姫を助け出す”というのが簡単なストーリーだ。

スーパーコンピューター内蔵のサイボーグが登場したり、宇宙船の映像が舞台の背景に飛び出すなど、一般的なオペラでは見られない演出が随所にある。音楽も台詞もわかりやすい。子ども向けといっても、スタッフ、キャストとも日本の一線級のメンバーがずらりと揃っているから、大人でも見応え十分の作品である。

「私どもとしては、子どもの頃から本物の芸術に触れて欲しいですね。それが豊かな感性を育てることにつながります。生で一流の舞台を見ることができるこの公演は、



スタッフ
編曲・指揮：三澤 洋史
台本・演出：田尾下 哲

美術：増田 寿子
衣裳：ひびの こづえ
照明：八木 麻紀
音響：渡邊 邦男
CGデザイン：COLORS
(江部 純一/武内 哲郎)
舞台監督：高橋 尚史

合唱：新国立劇場子どもオペラ・
ヴォーカルアンサンブル
管弦楽：新国立劇場子どもオペラ・
アンサンブル



まさにそのテーマを実現できるものなのです。おかげさまで知名度もあがり、お客さまの入りも増えてきています」と前田さん。

2007年は7月28日～30日、各日2回の計6回上演され、どの回もほぼ満席になった。大人も含めて約5千人の観客がオペラを楽しんだことになる。

オペラがお好きな方なら、この公演の入場料が2,100円と聞けば驚くはずだ。一般的にオペラは200人以上の舞台スタッフに関わる大きなイベントだ。したがって観劇料が20,000円～30,000円がごく普通の相場である。2,100円では制作費の半分にも満たない。

「そこが一番の悩みどころですね。新国立劇場は国民に

親まれる劇場をずっと目指しています。ましてこの公演は子どもたちが対象ですから、料金を上げたら実施が難しくなります。もちろん質も落とせない。ですから、企業などの協賛を得ていくことが必須なのです」

ステージの前半は暗い世界だが、主人公たちが謎を解いていくのに従い音楽も軽快になり、照明も明るくなっていく。それにつれ子どもたちの目もどんどん輝いていった。また来年も見たいという子も多かった。日頃、アニメやゲームなどバーチャルの世界ばかり見ている子どもたちは、目の前で展開されるリアリティに圧倒されるようだ。同財団ではこれからも、より多くの子どもたちにその迫力を伝えていきたいと考えている。

●担当者より

子どもたちの笑顔があふれる公演になりました。



子ども向けのオペラといっても、手を抜くことなく全力で制作していますので、本物の芸術を生で見ただけだと感じています。子どもは感受性が豊かですから、ただ一度見ただけでもインパクトは大きくて、帰りには歌を口ずさんでいるお子さんも多いですね。本当に素晴らしい公演になりました。改めてお礼申し上げます。

財団法人 新国立劇場運営財団 支援業務室 専門職員 前田秀文さん